第３部パネル　分科会46

居場所にはどんな形があり得るか

提言

地域により、始める人・集まる人により、
居場所は多様。
自分のやりたいことではじめ、そして、
多様な資源（人、組織、場所、物、お金等）を生かし
みんなで楽しみながら取り組もう。

登壇者

【進行役】	鶴山　芳子	(公財) さわやか福祉財団理事
【アドバイザー】	藤原　佳典氏	(地独) 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム研究部長
	河田　珪子氏	地域の茶の間創設者／支え合いのしくみづくりアドバイザー
	米田　佐知子氏	子どもの未来サポートオフィス代表
	大坪　直子氏	(一社) ふらっとカフェ鎌倉理事
	國生　美南子氏	(認定特非) たすけあいの会ふきのとう副代表
	土屋　龍太郎氏	土屋建設 (株) 代表取締役社長
	佐藤　昭男氏	(特非) ぽっかぽかすずかけ代表

■ 寄せられた声から

- すごく勉強になりました。どの話も笑顔で聴けました。
- それぞれ個性もありよかった。

議事要旨　鶴山 芳子

特徴ある６つの取り組みから、運営のコツや助け合う関係にどう発展しているのか、どう広げていくのか等、藤原佳典先生のアドバイスも交え議論し、多様な居場所の意義の深さと楽しさを会場全体で共有した。

多様な居場所１００あれば１００通り

「居場所は生き物。みんな魅力的」。居場所は地域により、その場所・始める人・集まる人により多様であり進化もする。「空き家を活用し、行政と協働のモデルとして展開」「高齢化率40％の自治会で、日変わりのプログラムを楽しみ生涯の仲間づくりへ」「空き教室を活用。子どもたちに呼び寄せられた高齢の親が次第に元気になりボランティアとして活躍」「建設業が様々な住民とベンチプロジェクトを実施」「地域食堂を不定期に地域のレストラン、施設等様々な場所で開催」「読み聞かせの社会参加をした人が年を重ね遠出が難しくなり、身近な居場所で活動をはじめ多世代交流で楽しんでいる」等、多様な魅力が会場に広がった。

やりたい人がみんなで楽しむ。
理念はブレずに進化する場はいきいきと

「『サービスの利用者』は一人もいない。みなが『場の利用者』」「困りごとはみんなで知恵や力を出し合うチャンス。助け合いにつながる」「楽しんでいるから、無理と思っている人は一人もいない」「みんなで協力してできることを出し合う」「自分たちの居場所だから思い思いで楽しんでいければいい」。魅力的な居場所は「やりたい人がやれるようにやるところがポイント。みんなで持ち寄り労力を分け合ってやっている」。自分たちの居場所だから楽しく、継続し広がる。また、理念は同じでも社会や環境の変化に合わせて変わることも良しとする。「22年経ち、子どもの生活も変わり、放課後子どもの姿はないが、障がいのある方も増えている。“でん”としていれば、みな仲良くなりよい雰囲気になった」「子ども食堂の半分は高齢者が参加し多世代化している」。柔軟に進化し、受け入れ合うコツも披露された。

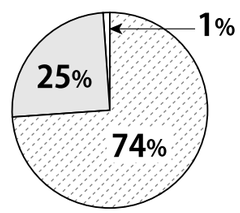
どう広げていくか

「生業に関わる事業者が関わることで広がれば…」と地元企業が住民と取り組んだ。「『ありがとう』に強面の建設業者は気分をよくし、住民との距離が狭まり、元気になった。参加した高校生もその活動が地域を思う気持ちにつながればうれしいと言う」と次世代育成にもつながっている。「『定休日ならできる』とお店の参加が増えている。発信すれば同じ思いを持つところはある」と地域をよくしていきたいという思いのある企業やお店や施設などはあり、働きかけることでウィンウィンの関係が生まれていた。

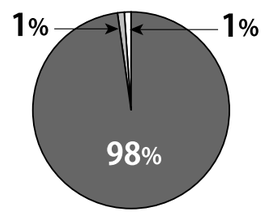
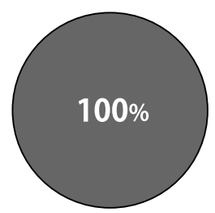
「行政と住民は寄って立つ場が違う。一緒に話し合いながら住民主体を進めている」。かつては井戸端や縁側へ自然に集ってきた。社会環境や暮らしの変化から、現在では「通いの場」をはじめ行政が支援する時代に。最後に藤原先生から「一般介護予防の予算は融通が利く。生涯学習、子育て、障がい者など他の事業も介護予防の傘の下に一致団結して実践していくのが理にかなっている。ネットワークをつくっていくことが大切」とコメントをいただいた。共生社会の基盤となる多様な居場所をみんなで広げようという機運が高まった。

アンケートの結果　参加者概数：175名　回答者数：126名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方